

# 岡山支部通信

【連絡先】〒700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1 岡山大学大学院社会文科学研究科 松木武彦

http://sky-geocities.jp/jsa\_okayama/index.htm TEL. (086)251-7457 E-mail: matugi@cc.okayama-u.ac.jp

---

## 【目次】

1. 岡山支部例会「よもやま話の会」開催のお知らせ  
11月16日(月)「認知症の早期診断技術」
2. 「よもやま話の会」報告  
「昆虫の行動を科学する：－死んだふりは適応的か?－」9月7日報告
3. 2009年「原水爆禁止・科学者集会」の報告 8月2日開催

---

## 1. よもやま話の会 開催のお知らせ

### 「認知症の早期診断技術」

講師：岡山大学大学院自然科学研究科教授 吳 景龍 氏

日時：11月16日(月) 17:30～18:40,

場所：岡山大学工学部1号館 大会議室(場所がいつもと異なります)

認知症は、計算・言語・思考・記憶等の知的な機能に障害が起きた状態をいいます。認知症の診断は非常に難しく、頭部 CT 画像には異常が現れないため発見が困難であり、「見えない障害」と言われています。現状では、まだ統一的な診断方法・基準が確立されていません。演者らは視覚、聴覚および触覚の多感覚の認知・注意特性の基礎研究を行い、その研究結果に基づいて、認知症の早期診断技術の確立を目指しています。そのため、認知実験と脳波(EEG/ERP)・機能的磁気共鳴画像(fMRI)を用いて脳機能の計測・解析及び医療福祉機器への応用に関する研究を行っています。

本講演では、まず、今年度から、認知症早期診断の関連で日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業として行っている認知症の早期診断に関する諸研究課題の概要を簡単に紹介の後、認知症の現状と関連する研究成果を紹介して頂きます。

いずれも参加無料です。

教員、学生、市民の皆様の多数のご参加をお待ち致しております。

## 2. よもやま話の会 報告

### 昆虫の行動を科学する：－死んだふりは適応的か？－

――岡山大学大学院環境学研究科・宮竹貴久 9月7日報告――

私たちの研究室では、昆虫の行動の適応性、昆虫行動の生態遺伝学的解析、そして昆虫行動を応用した害虫防除の研究を行っている。講演では、まず、最近、害虫防除の関連で農林水産省と共同もしくは委託プロジェクト研究として行っている諸研究課題

- ①沖縄における南方系侵入害虫の再侵入防止対策の一環としてのウリミバエ時計遺伝子と交尾時刻の生態遺伝学的解析、
- ②多種多様な栽培形態でアブラムシを効率的に防除できる飛べないテントウムシの天敵としての評価、
- ③新規光源 LED を利用した貯穀害虫類の防除法の確立



について、それぞれを簡単に紹介した。

次に昆虫を含む多様な動物が示す「死んだふり」が適応的な行動であるのか、貯穀害虫であるコクヌストモドキとその捕食者を用いた研究を紹介した。死にまねは、ニワトリやヘビ、カエル、昆虫など多くの動物で観察されるが、本当にそれが生存に役立っているのかは、良くわかっていなかった。私たちは、穀類の害虫のコクヌストモドキが、天敵のアダンソンハエトリグモに対して、死にまねすることで生き残る可能性を高めていることを実験で確かめた。まずコクヌストモドキの遺伝的な選抜を10世代繰り返して、死にまねを頻繁にする系統と、ほとんどしない系統を作成した。それを天敵のクモと一緒にして、どちらの系統が生き残る可能性が高いか比べた。各14回の実験で、死にまねをする系統は13匹が生き残ったのに対し、しない系統は5匹しか生き残らなかった。また死にまねをする系統は普段からあまり動かないのに対し、しない系統はよく動き、刺激に対して走って逃げることもわかった。そこで動物の活動性を支配する体内物質を比べたところ、死にまねをする系統では、しない系統に比べ脳内でのドーパミンの発現量が多かった。この結果は、活動性が遺伝的な影響を受け、敵に襲われた時、活発に動く個体は逃げるのに対し、活動的でない個体は死にまねをして敵が去るのをやり過ごす生存戦略が進化の上で有利な可能性を示している。

### 3. 2009年「原水爆禁止・科学者集会」の報告

----- 白井浩子 -----

核兵器廃絶の流れを世界の大河に」のメインテーマで、2009年8月2日、兵庫県私学会館(神戸)で開かれました(全国21都府県から120名の参加)。8つの報告、全国事務局長の挨拶、コメント、総合討論など。

■<挨拶>実行委員長・金持徹氏(神戸大名誉教授・電子論) 情勢に見合った企画を心がけたとありました。

■<基調報告>「核兵器のない世界へ」石川康宏氏(神戸女学院大学)。世界支配の野望をもったアメリカ帝国主義と核兵器の関係の歴史を、世界構造の大きな変化から捉え、視野や論点を整理しました。

■<報告>「北朝鮮の核開発にどう対処するか?」康宗憲氏(早稲田大学客員教授)。日本のメディア報道には北朝鮮の「異常」をあおる姿勢も目立ちます。しかし、日本のロケット打ち上げは許容し、北朝鮮の打ち上げは許さないアメリカの二重基準は確かに妙です。金正日政権が求めているのは、その体制への安全保障であり、6カ国協議で採択された2005年の「9・19共同声明」は、(北朝鮮のみでなく)朝鮮半島の非核化を目指し、「行動対行動」の原則で合意を実施する、とあり、相互の主権の尊重と平等の原則に立った外交努力が必要、との指摘がされました。

■<ビデオメッセージ>益川俊英氏(2008年ノーベル物理学賞受賞者)。反戦・平和の思い、憲法問題、科学者の役割、未来への展望などについて、インタビューに答える形で言及しました。

■<挨拶>米田貢(JSA全国事務局長)

■<海外代表の特別報告>「Dawn of Hope and Nuclear Paradoxes」Dr. Joseph GERSON。ブッシュに代わるオバマ政権の評価について、次の重要な指摘がありました。

① プラハでの「核兵器のない世界」に言及のオバマ演説の背景に、NPT体制が崩壊して、核兵器がテロリストらの手に渡ることへの恐れがあったこと。

② CHANGEを約束しながら、今なお核抑止力に依存する立場を捨てていないこと。

③ 破綻したアメリカ経済の再建と、世界におけるアメリカのヘゲモニー回復を、国内の自由主義エリート層から強く期待されていること。また、日米間での核兵器の持ち込みに関する密約に関して、この密約を、非核三原則(作らず、持たず、持ち込ませず)を後退させる契機にしようとする動きに警戒が必要であり、依然として「核の傘」に固執する日本政府の姿勢を変革する必要が強調されました。

■<コメント>「アメリカを中心とする核兵器開発と核兵器廃絶へ向けた動き」山崎文

徳（立命館大学）。1945年～2009年の主要な政治的動きを表で整理しました。

■＜報告＞「原爆被爆者集団訴訟が明らかにしたもの」沢田昭二氏。国の原爆症認定基準（初期放射線のみを考慮した2000年までのDS86、「原因確率」による2001年からの基準）の非科学性を明らかにしてきた同氏は、とくに内部被爆の影響（症状の統計的事実）を考慮することの重要性などを指摘しました。

■＜報告＞「沖縄の基地再編問題」亀山統一氏。住民に多大な負担と被害をもたらしている米軍基地が占領下の無権利状態で作られたこと、日本国憲法が適用された1972年以降は新しい基地の建設はないこと、再編計画の1つの焦点である普天間基地の移設も10年以上住民の運動でこう着状態にあること、などを述べ、基地問題の解決は核廃絶の大きな足かせを取り払うものであると強調しました。

■＜報告＞「核廃絶と憲法9条」和田進氏（神戸大発達科学部）。日本国憲法の平和主義と核兵器廃絶運動の関係を、平和的生存権を軸に論じました。

■＜報告＞「非核「神戸方式」とNPT再検討会議」梶本修史氏（兵庫原水協）。核兵器を積載した艦船の神戸港への寄港を1975年から30年以上にわたって阻止してきた非核「神戸方式」の歴史が詳しく紹介されました。

■＜総合討論＞13名が発言。原子力平和利用と核拡散、自衛のための核武装論、マスメディアの問題、イタリア原爆展を開いた経験の紹介、カットオフ条約の評価などについて、活発な意見交換が行われました。

■＜閉会挨拶＞廣森勝久（実行委員）以上の報告と討論を通じて、2010年5月のNPT再検討会議へ向けて、『核兵器のない世界を』の国際署名の運動推進を含め、いくつもの課題と行動指針が示唆された、とまとめられました。

編集後記：2009年度第1号がようやく発行できました。なかなかまとめるだけといってもいろいろ考えて作らないといけないことがあり、前任者のコンパクトにうまくまとめられた仕事には感心致します。先日、「活かせ憲法守れ9条岡山のつどい」に行ったのですが、小森陽一氏の話がとてもおもしろかったです。話を思い出そうとネットで検索をかけるといろいろ出てくるのがこれまた以外におもしろいですね。

皆様、地域の活動への報告、支部通信を読んでの感想や、身近な元気の出る話題など、投稿をおまちしています。

（衣笠）